オンライン授業における大学初年次教育：学習者の気づきを促して

仲　川　浩　世

The Online First-Year Experience: Cultivating Students' Self-Awareness

Nakagawa Hiroyo

抄　録

本稿では、オンライン授業における大学初年次教育の一環であるOJUゼミの取り組みを紹介する。本授業の目的は、メディア、特に新聞記事を読ませて批判的思考を発達させ、口頭発表能力を育成することである。新型コロナウイルス感染拡大対策により、2020年度のOJUゼミは初めてZoom上で実施した。該当授業履修者は新聞のニュース記事を読み、選択したテーマに対してプレゼンテーションを行った。授業後、振り返りを分析してみると、他の学習者の発表を聴くことで、気づきが高まったことがわかった。その結果を踏まえて、今後の授業案と指導法を提示し、オンライン初年次教育における協働学習の利点についても示唆する。

キーワード：初年次教育、オンライン、気づき、振り返り、新聞記事

（2020年9月24日受理）

Abstract

This study describes the Online First-Year Experience seminar at Osaka Jogakuin University (OJU). The purpose of the class was to develop critical thinking through news media analysis and oral presentation skills. As a result of the COVID-19 pandemic, the 2020 seminar had to be conducted on Zoom for the first time. Participants critically evaluated themes through newspaper articles, built their thoughts, and gave oral presentations. After each class, they reflected on their performance, which showed that their self-awareness has been enhanced through peer presentations. Analysis of their reflections also suggested lesson plans and approaches to future seminars and demonstrated the benefits of collaborative learning in the Online First-Year Experience.

Keywords: First-Year Experience, online, self-awareness, reflection, newspaper articles

（Received September 24, 2020）

1. はじめに

1990 年代末から大学生の学力低下問題が社会の関心事となっている。高校卒業後から大学入学までの移行時期に、学習意欲の低下、学習習慣、規範意識などに問題を抱えている現状が報告されている（濱名，2006；森・山田，2009）。その中には過度の欠席により、単位を取得できずに再履修クラスを受講したり、新しい環境に馴染めず大学を中退したりといった学習者も存在する。それゆえ、大学側は支援策として、何らかの措置を検討する必要があろう。

一方、アメリカでは、1970 年代後半から 1980 年代前半にかけて、「高等教育における中退率抑制」のための初年次教育が盛んとなった。初年次教育は「First-Year Experience（初年次の経験）」（山田，2013，p.14）という名称で認識され、オリエンテーション活動を中心としたプログラムが実施されている。 日本においては、初年次教育学会が 2007 年に設立された。川嶋（2006，p.3）は「高校（と他大学）からの円滑な移行を図り、学習および人格的な成長に向けて大学での学問的・社会的な諸経験を“成功”させるべく、主に大学新入生を対象に総合的につくられた教育プログラム」と初年次教育を定義づけている。各大学でも、入学生を対象に様々な取り組みが行われ、入学前教育の事例研究（井下，2013）や入学後のオリエンテーションを大学生活に繋げるためのプログラム（山崎，2013）も報告されている。

本学でも智原（2006）が述べているように、大阪女学院短期大学 OJC（Osaka Jogakuin College）の初年次教育は実施されている。

> 大学を人格形成の場としてとらえ、学生ができる限り主体的に行動できるように、また大学で学ぶことやその先で働くことにはどういう意味があるのかを探し出すために、初年次に必要な知識やスキルを身につけさせること（智原，2006，p. 149）

しかしながら、2020 年度春学期、新型コロナウイルス感染拡大の影響のため、多くの教育現場は緊急事態の対応策として、オンライン授業へと移行せざるをえなかった。日本において、オンライン上の初年次教育の実践研究はまだ少なく、指導法も確立されてはいない。本稿はこのような背景から、オンライン上の初年次教育である本学の OJU（Osaka Jogakuin University）ゼミに焦点を当て、その効果を考察することを目的とする。そして、授業後の履修者の振り返りから、どのような気づきを得たかを探り、今後の指導の可能性を示唆する。

2. 先行研究

2. 1　初年次教育

国公私立 776 大学（回収率 99%）を対象とした教育内容等の調査（文部科学省，2015）から、初年次教育において口頭発表能力の強化を行っている大学は、2011 年では 70% であったが、2015 年では 82% と増加したことがわかった。学習意欲の低下を防ぐためには、

口頭発表能力の育成をする際、学術的な専門分野の導入も欠かせない。大学に馴染んだものの、授業内容を理解できなければ、やる気を失い、中退という問題を引き起こしてしまうからである。よって、初年次教育には入学者の支援プログラムからアカデミックなコンテンツへの移行が不可欠である（山田，2013）。

薄井（2015）は、初年次の日本語のアカデミック・ライティング指導に、パラグラフ・ライティングと論証の技法を活用し、論理構造の指導実践を報告した。その結果、受講者のリテラシーだけではなく、学問的な学びや関心にも寄与したと述べている。また、藤本（2017）は基礎的・汎用的能力向上の導入として、新聞記事への見解をポートフォリオに入力させる試みを紹介した。吉田（2017）は日本語文章表現クラス（母語話者対象）において、日本人学生の対話表現や作文内容の浅さという問題点、社会問題などへの関心の低さを改善すべくテーマを与え、グループ・ディスカッションから、コミュニケーション能力の発展に努めた。安田（2015）は初級者（TOEIC 230 ～ 430 点）対象のフレッシュマンセミナーに、多読からアクティブ・ラーニングに従事させる取り組みを実施した。その結果、英語力だけではなく、学習者の動機づけ向上に効果的であったと論じている。このようなコンテンツを重視した初年次教育の先行研究の背景を受けて、OJU ゼミの実践概要について論じる。

2. 2　OJU ゼミとは

OJU ゼミのシラバスの特徴について言及する。該当科目は大学 1 年生の必修演習であり、春学期 15 回、週 1 回（1 単位）開講される。そして、7 名の担当教員が各クラス約 20 名程度の学生を統一の手順（3. 2 参照）に沿って進めていく。シラバス内に「キリスト教教育に基づく共同体の一員として、人格的存在の自己を形成し、高い人権意識を持ち、他者意識に基づくコミュニケーションができること」と述べられているように、該当科目は「英語教育・キリスト教教育・人権教育」という理念で成り立つ。さらに、授業の 2 つの目的は、「①現代社会のさまざまな出来事や課題について、基本的な情報を入手して読み、理解を深めることができる」「②国内外の政治・経済・文化の問題について考察し、ディスカッションや自らの見解をまとめ、発表することができる」と言及されている。

次に OJU ゼミならではの 5 つの特長を提示する。

1. 居場所作り：退学率を下げるために、アドバイザー制度を取り入れ、アカデミックな要素を含みつつ、学生の居場所となる環境を整えた。
2. PDCA サイクルと EIAHE サイクルの導入[1]：現代社会が直面している課題を、自分に引きつけて考える姿勢を身につける。頭で考えて終わるのではなく、実際に何らかの行動を起こし、行動の結果からさらなる考察を得るような構成にした。PDCA とは、Plan（計画）、Do（実行）、Check（評価）、Act（改善）であり、EIAHE とは、Experience（経験する）、Identify（指摘する）、Analyze（分析する）、Hypothesize（仮説化する）のことを指す。
3. 現在、若者の活字離れが問題となっている。したがって、入手しやすい紙媒体の新聞

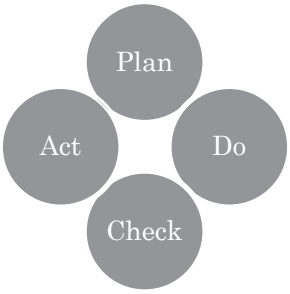

図 1. PDCA サイクル

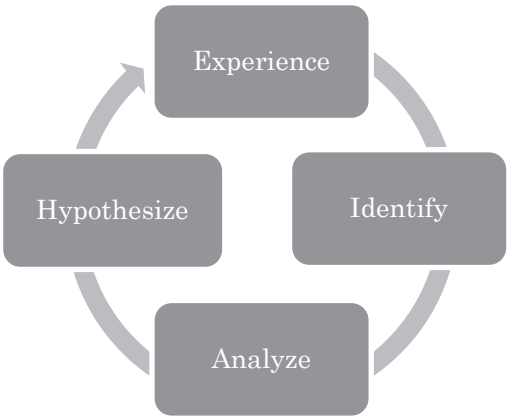

図 2. EIAHE サイクル（体験学習モデル）

を教材に選択した。藤本（2017, p.176）も社会への関心度を高めるための教材として、初年次教育に対する新聞の活用を主張している。

4. 自主性を尊重するため、学習者自らが選んだ新聞記事のテーマのプレゼンテーションをさせた。
5. 協働学習の要素を導入するために、後半にグループ・プロジェクトを実施した。協働学習は、「主体的・対話的で深い学び」を可能とする（福嶋，2018）。これらの先行研究を踏まえ、研究課題として「OJU ゼミの学習者の意識は受講後どのように変容したか」を設定した。

3. 研究方法

3. 1　調査協力者

本研究の調査協力者は、本学 2020 年度入学者、春学期 OJU ゼミ履修者のうち、筆者のクラスを学習した 1 年生 21 名（4 名の留学生を含む）である。全入学生（142 名）の平均の TOEIC IP テストのスコアは 422.4 点である。この数値は、リメディアル･レベル（TOEIC 202.78 点）（牧野，2017）よりも高く、調査協力者は、初級から中級未満の英語学習者で

あると考えられる。

3. 2　手順

まず、OJU ゼミの授業概要について述べる。新型コロナウイルス感染拡大による休校の後、全ての授業がオンライン上で実施となり、2020 年春学期は通常 15 週であるが、12 週へ減少した。尚、本学は英語や韓国語という外国語教育に重点を置いた大学である。しかしながら、大学に入学したばかりの学習者を支援する初年次教育のため、授業は日本語で実施された。留学生も、卒業後日本社会で活躍できるように、日本語能力の強化に努めた。次に授業展開とスケジュールを提示する。

＜ OJU ゼミの授業スケジュール＞

Week 1　統一授業：『OJU ゼミについて』『メールの書き方』（動画を視聴後、担当教員に自己紹介メールを日本語で書いて送付する。今後の個人のプレゼンテーションのため、関心のある新聞記事のスクラップをするよう指示する）

Week 2　統一授業：『なぜ紙面の新聞を読むのか』（資料を読み、紙面での読書について課題を提出させる）

＊使用資料：朝日新聞デジタル（2020）『（新型コロナ）困っています　大学生・院生　生活費払えない、9 人に 1 人』

Week 3　Week 3 より個別授業（オンデマンド授業）

担当教員の選択した新聞記事『新型コロナウイルスによる休校』を読み、自分の意見をまとめて課題提出

＊使用資料：朝日新聞朝刊（2020）『遠隔授業「通学の意義」問えば深まる』21.
朝日新聞朝刊（2020）『ストレス発散に運動「楽しい」大切に』21.

Week 4　Zoom の授業：初回は顔合わせであるため、自己紹介後、Zoom のブレイクアウトセッション機能[2]を利用して、Week 3 の課題に対するディスカッションをグループに分かれて行った。また、前週（Week 3）の課題に対する振り返りを樋口（2014）によるテキストマイニングで分析し、それを基に筆者がスライドを作成し、Zoom 上で共有してプレゼンテーションを行った。

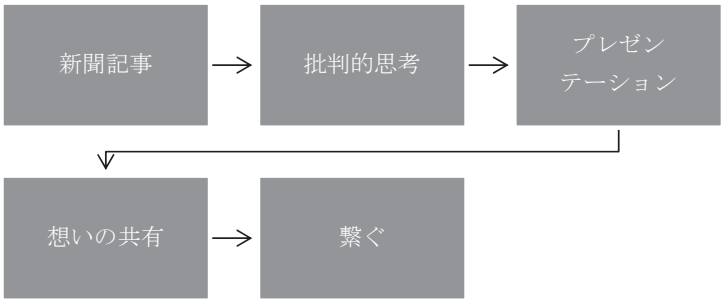

図 3.　OJU ゼミの授業展開

Week 5　学習者にプレゼンテーションのトピックを選択させ、授業を進めた。

Week 6　クラス全体でプレゼンテーションの準備に従事した。

Week 7 ～ Week 10　個人の発表を実施した。

1 回の授業で 4 人程度が発表用スライドを作成し、iPad を用いて共有し、Zoom 上で 1 人 10 分～ 15 分程度で発表した。筆者は発表者に授業後メールで直接フィードバックを与えた。聴衆の質疑応答の時間を確保できなかったため、Google Forms に振り返り[3]として①～④の自由記述の回答を書かせた。

①「授業に参加して初めて知ったこと」

②「授業に参加して改めて重要だと思ったこと」

③「授業に参加してさらに調べてみたいと思ったこと」

④「授業に参加して今後の学びのために残しておきたいこと」

上記の質問は、統一授業の際に振り返りとして提供されたものを継続して用いた。

Week 11 Week 12 のグループ・プレゼンテーションの準備をさせた。

Week 12 クラス全体でグループ・プレゼンテーションをさせた。時間的な余裕がなかったため、スライド作成はオプションとし、興味のある記事に対して自分の意見を口頭で発表させた。

Appendix　教員のプレゼンテーションスライド（Day 4）

研究課題

休校時期から得た気づきによって，今後の生活を改善するには，どのようにすればいいか？

7

調査

OJU ゼミ　クラス

（履修者22名中　15名回収率　68%）

自由記述「新型コロナウイルス期間中の休校」

①改めて重要だと感じたこと

②今後の学びのために残しておきたいこと

③その他

8

研究方法

自由記述結果（匿名）をテキストマイニングで質的に分析し，キーワードを基に意識を探る

9

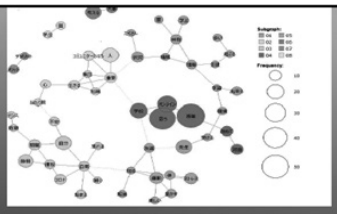

図1. 休校に対する自由記述（*N* = 15 ）

10

表1. 抽出語リスト（*N* = 15 ）

名詞		サ変名詞		形容動詞	
オンライン	26	授業	54	大切	13
学校	22	運動	13	重要	10
自分	18	対面	10	大事	9
先生	17	共有	9	不安	8
ストレス	13	自粛	9	当たり前	5
コロナ	10	休校	8	正直	4
期間	10	一緒	7	非常	4
状況	10	解消	5	不安定	4

研究結果

- 授業に対して改めて，認識する学生が大半であるということがわかった。
- 休校から，ストレスを抱えているため，運動への意識が高まったことが明らかとなった。
- 人とのコミュニケーションの重要性について，再考する学生もいた。

12

研究結果

一方で，オンライン授業となった現在，自分と先生とのかかわりについて，見つめ直す学生もみられた。

13

考察

- 休校後，対面授業を受けられない状況から，自分の学習への取り組みに気づく学生が大半であった。
- 家で過ごす時間を有意義にするために，どのようにすべきかという意見もみられた。

14

まとめ

休校⇒オンライン授業という現在の状況を受け入れ，より充実した生活を送るためには，受け身ではなく，自主的に生きる姿勢を身につけるべきではなかろうか。

15

ご清聴ありがとうございました。

16

4. 分析と結果

調査協力者の振り返りの分析結果について論述する。①～④の自由記述のキーワードを抽出し、その回答例も挙げた。12 週のうち、Week 7（初回の個人のプレゼンテーション実施日）と Week 12（授業最終日・グループ・プレゼンテーション実施日）を選択し、21 名中 18 人（回収率 86%）の振り返りを回収後調査した。本稿におけるカテゴリーの分類は、馬場（2012）を参照とし、内容の傾向に焦点を当てた。振り返りの中から、重複したコードを抽出し、さらに Week 7 と Week 12 毎に分類して提示した。表 1 にはコード化した中から特徴のあるキーワードを示した。本研究は予備的であり、調査協力者も少数のため、量的な分析は実施せず、学習者の気づきのみ論じる。

Week 7

コード 1：機器の使い方（画面共有・パワーポイント・ビデオカメラの使用方法）

オンライン授業となり、通常対面授業で実施予定のプレゼンテーションが、iPad を用いて Zoom 上で実施となった。これはある程度の IT スキルを必要とされるものである。以下がその抜粋である。

＊画面共有の仕方がわかって学びになった。
＊初めて知ったことは情報を表現する方法である。
＊見やすいスライドを作るため、集中しやすい配色なども調べたい。
＊カメラはオンにした方が聞いている側にとっては心地がいい。
＊カメラをオフにしていたので皆さんの顔は見られず、ただ画面をずっとみているだけだったので最後の方はどれだけ分かりやすい内容でも飽きが生じた。

コード 2：人種差別について

アメリカで白人による黒人の発砲事件が起こり、それによるデモが注目された時期でもあった。そのために、同じ日、半分以上の発表者が黒人差別というテーマを選定したこともあった。よって、差別そのものに対する気づきが生まれ、黒人差別以外の人権問題にも意識が高まった。

＊黒人差別というものがこんなにもひどく残酷だということを知った。
＊黒人差別というものは昔から存在しており、それは植民地というものとの関係があった。
＊黒人の少年がおもちゃの拳銃で遊んでいたところ白人が目撃して不審者だと通報され、警察官によって射殺されるという事件を知った。
＊人間教育の一環として黒人差別について授業に取り込むという考えだ。なぜなら、人間は肌の色に関係なく、誰でも同じように扱われるべきだからだ。

コード 3：話し方

前半の振り返りでは、発表の形式そのものに関するものが多くみられた。その中でも、機器以外に話し方について特に関心が集まった。

＊聞いていて心地よいことを目標にすることが大事だと思った。
＊プレゼンテーションで大事なのはイントネーションだということも感じた。
＊話す内容や喋るスピードも大事だと思った。
＊問いかける感じを意識して参加型にすれば、もっとしっかり聞いてくれるのではないかと思った。
＊今回はいつもと違うオンライン上でのプレゼンテーションで、聞いている人たちの顔が見えずとてもやりづらさを感じた。
＊今回はリモートだけど、相手が聞いていることを意識しながら発表できたらいい。
＊はきはきと端的に聴衆に向けて発表することが大切だなと思った。

Week 12

コード 1：ニュース（情報）

Week 12 になると、授業を通して、多様なニュースの存在を知ったため、情報の量とそれをどのように理解するべきかという意見とに分かれた。

＊普段あまりニュースを見ないので、こうやって調べて、今の日本の経済の状況や、政府が何をやろうとしているのか、それに対しての国民の意見など、たくさん知ることができた。
＊現代のニュースを聞くだけでなく、掘り下げると情報量が莫大に隠れていることが強く感じられた。
＊マスメディアの情報は大袈裟に言っている事があり、大衆はそれに影響されやすいので、自分で調べ納得のいく結論を出していく事がこれから大事となってくる。

コード 2：ニュース（興味）

＊違う人の視点でニュースを見られたことで、同じニュースでも違う印象を受けることがわかった。
＊ニュースについて自ら調べて、問題に対して意見を持つことが大切だと改めて思った。
＊今まではニュースを見てもこんなことがあると思うだけで終わっていたが、どれも背景があって表面を見ただけでは知ることができないことがたくさんあった。
＊私はこの授業を受けるまではニュースには全く興味を持っていなかったが、この授業を通してニュースを目にする機会が増え、発表から世界の現状やニュースを知る事が出来た。

コード 3：グループ

グループ・プレゼンテーションへの準備から、個人での取り組みとは異なった気づきを

得たこともわかった。また、協働学習の効果から、お互いに助け合い、情報を共有したことが明らかとなった。

＊共同作業なので凄く考えることも多かったが、相手と協力することで自分以外の考えを取り入れることができたのはいいことだった。

＊今まで積極性はなく、いつも話を聞いている側の人間だったが、OJU ゼミに参加してからは自分も発言していいと知り、率先してグループ・ワークに取り組むことができた。

＊自分の意見で正解がないということが自分の気持ちがとても楽で、グループ・ワークも楽しかった。

＊グループ内での話し合いの時は誰か 1 人だけがずっと話し続けるのではなく、みんなにまわしたり、順番を決めたりしてグループ・メンバーひとりひとりの発言量を同じくらいにする。

＊グループになったのはいいものの、このグループのメンバーが一緒になって発表するのはオンライン上では出来ないということも知った。

コード 4：助ける

コード 3 のグループ、Week 12 の「死・自殺」など重い発表テーマの結果得た気づきである。

＊周りの友達が困っている時は助ける事が出来ると思うので助けの手を差し伸べる人になりたい。

＊命について改めて考え、安易に死を考えず周囲の人の助けを呼ぶ声にいち早く気づきたい。

＊周りに苦しんでいる人がいれば、声をかけるべきだ。もし助けられなかったとしても相手に心配してくれる人がいることに気づいてもらえたら、それだけで十分だと思う。

コード 5：コミュニケーション

オンライン授業の経験を通して、対面における対話の不足から、直接的なコミュニケーションの重要さを認識したと考えられる。

＊大学を退学する 1 つの要因として、相談できる人がいないという理由が増加しているため、コミュニケーションを取るようになれば、回避できるようになると思う。

＊オンライン授業ということもあり、コミュニケーションを簡単に取ることのできない状況で、どうしたらうまく相手に物事が伝わるのか、とこれまでにないくらい考えた。すると、コミュニケーションはできる限り直接話す状態に近づけることが重要だと分かった。

コード 6：生きる

Week 12 の「死・自殺」などを取り上げた発表内容から、生きる価値を改めて認識した気づきである。

表 1. Week 7 と Week 12 の 4 つの質問に対する振り返りのキーワード

	Week 7	Week 12
初めて知った	ビデオカメラの効果 画面共有 パワーポイントの作成方法 文字の強調の仕方 人種差別・黒人差別	グループ・ワークの良さ Go To キャンペーンの効果 ニュースに対する関心 コロナウイルスの後遺症 中傷・自殺・安楽死など命の価値 情報の真偽 自分の学習に対する積極性
改めて重要	アイコンタクト 聴いていて心地よい発表へと 明確なスライド（イラスト・統計） 温かいメッセージを持つ（優しさ） 自信のある発表態度 話すスピード コロナウイルスの影響に対する知識	自分の気持ちの効果的な伝え方 ニュースを見て批判的に考えること 友達との授業作り 意見の共有、共感 コミュニケーションのできる環境 生きることの大切さ・価値
さらに調べたい	今回取り上げたテーマをさらに追究 黒人差別の歴史的な内容 発表時の声の強弱 スライドのアニメーションの工夫 わかりやすい説明の仕方	暗い内容のテーマを知ることの大切さ コロナウイルスのワクチン 広い視野で物事を見ることの大切さ SNS の誹謗中傷 コロナに対する差別 中国の貧富問題と NGO の取り組み 基本的人権
今後の学び	カメラの使用方法 情報収集 語りかけるような話し方 スライドの文字の大きさ ひとつの例に絞って発表 温かいメッセージから得た優しさ 人間教育として黒人差別を授業に導入	新聞に対する自分の意見・関心 物事への意識 簡潔な話し方 自発性・積極性 助けを呼ぶ声への気づき 家族や友人との問題の共有

＊生きることが嫌でつらい時、自殺しようと思う時、そんな時に相手と相談をして、生きる価値を見つけることが大事だ。

＊もし周りに辛い思いを抱いて一人で悩みを抱え込んでいたりしている子がいた時、少しでも気持ちを軽くしてあげるにはどんな方法があるだろうか、反対に自分が生きていることが辛くなったら、どのように向き合うのが良いのか気になった。

＊生きることは難しいことなのかもしれないけど、本当に大切なことだと思った。生きる恐怖が死ぬ恐怖を上回ることがもしかしたらあるかもしれないけど、そうなる前に周りの人に相談して頑張って生きたい。

5. 考察

分析の結果から得た 5 点の見解を論じる。

1. iPad の使用によるスライドの作成・発表
2. 偏ったテーマの選択
3. 話し方
4. グループ・ワークの実施

5. 授業外のインターラクション

まず、1の「iPadの使用によるスライドの作成・発表」については、Week 7では、ITスキルに関するものが目立つ。本学は、他大学とは異なり、2012年から全学生がiPadを用いて授業に臨んでいるため、比較的オンライン授業に抵抗が少ないようである。また、情報倫理教育を並行して履修しているため、ITスキルの修得も吸収が速いということが観察された。しかしながら、Zoom上におけるiPadを用いたスライドの共有は、高度な情報リテラシーの技術が求められた。また機器面の問題点として、Wi-Fi接続・ネットワーク環境の不備により、Zoomから途中退出せざるをえない学習者もいた。したがって、e-learningは効果的でもあるが、機器の状態によって影響を受けやすいため、今後適切な代替手段を検討すべきである。

次に2の「偏ったテーマの選択」について触れる。全面的にテーマの選定は学習者の自主性に任せていたため、当時最も注目されていた、黒人差別、コロナウイルス、Go Toキャンペーンといった題材に偏った傾向にあった。各学習者が違った視点から発表し、全く同一の内容とはならなかったが、新聞記事には豊富な題材が含まれているにもかかわらず、この問題は今後の課題として考えるべき点である。より批判的な思考への気づきを発展させ、全員の知識を高め合うためには、幅広い分野のテーマの選定が望ましい。そのためにも、教員による知識の提供（政治・経済・科学・環境・文化・歴史など）や学習者へのプレゼンテーション準備の初期の段階からの支援が求められる。

三面記事（社会面の記事、特に犯罪や事故など）からテーマを選択すれば、情報の誇張の見極めも不可欠である。Week 12の振り返りに「情報の真偽」というコメントが含まれていた。学習者自身も、情報を深く読み取る能力が必要であるということに気づいたと言えよう。今後の課題として、プレゼンテーションのテーマには「より良く生きるためには何ができるか」という視点で、環境やテクノロジー、文化など多様な題材に焦点を当てることが望ましい。「犯罪」などメディアの誇張表現ではなく、学習者自らが判断し、「取り上げる意義のあるテーマを見抜く能力」の養成を考えていきたい。

3の「話し方」については、Week 7の抜粋から以下のことがわかる。「問いかけるように話す」「オンライン上のため、工夫が必要」と述べられているように、聴衆のことを意識し、一方通行ではないプレゼンテーションを目標とし、自分たちで作り上げる授業にするという気づきがみられた。Week 7と比較すると、最終日のWeek 12では「友達との授業作り」「意見の共有、共感」というコメントから、能動的な学習姿勢へと変容したことがわかる。

次に4の「グループ・ワークの実施」については、「相手と協力することで、自分以外の考えを取り入れることは良い」「自分の意見で正解がないということが自分の気持ちが楽でグループ・ワークは楽しかった」という利点が顕著な反面、ブレイクアウトセッションにより、グループ全員が同時に他の聴衆に発表することが可能ではないということも明らかとなった。ブレイクアウトセッションというのは、グループ間のメンバーの話し合い

には適切であるが、対面授業のように、1つのグループが他の聴衆に向けて発信することはできない。各グループに教員が順番に訪問して、個々に支援することはできるが、他のグループの様子はその間見えない状態となる。このような限界もあったが、グループ・ワークに取り組んでいる間に、連絡先を交換してコンタクトを取り始め、インターラクションが活性化されたこともわかった。その結果、お互いを知る機会へと発展した。次にその効果を述べる。

5の「授業外のインターラクション」は、コード4の「助ける」の抜粋「周りの友達が困っている時は助ける事が出来ると思うので助けの手を差し伸べる人になりたい」というコメントから、悩みや楽しみを共有するという学習者の気づきを表している。学習者同士の繋がりの発展や、授業外の交流も盛んとなり、他の授業を履修する学習者同士の親交へと結びついていったと言えよう。学習者が他人事ではなく、周囲を助けること、誰かのために行動することを学び、その気づきを得たことを表している。

すなわち、Week 7では、機器の使い方に関する振り返りが大半を占めていたが、Week 12には「お互いに助け合う」ということを主体的に学んだコメントへと変容した。発表を通し、思いを共有し、助け合うことに気づいたのである。

6. まとめ

本稿では、オンライン授業におけるOJUゼミの履修者の振り返りを分析し、今後の課題となる指導法を示唆した。Week 4 ～ Week 12までは、Zoomにより授業を実施したが、担当教員である筆者がiPadやZoomに対して経験不足であったため、機器の使用に慣れるまで時間がかかったことは反省すべき点であった。また、ネットワーク環境が整備されていない学習者の場合、接続が途中で切れてしまうという問題もみられた。最終日のグループ・プレゼンテーションにおいては、Zoom上のブレイクアウトセッション機能を用いたため、実施方法に工夫が必要であった。各セッション内の学習者同士は話し合うことができるが、結果を発信するには、セッションを終了して、全員の画面に戻って順に発表しなければならなかった。

春学期は全面的にオンライン授業であったが、秋学期からは再び対面授業が開始された。今後の教育には、オンラインならではの良さを導入した授業のハイブリッド化を検討したい。例えば、課題（レポート・動画など）をGoogle Driveなどに提出したり、事前に授業の予定をMoodle上で連絡したりすることも可能となる。面談はSkypeで行うこともできよう。さらに、大学に何らかの事情で出席できない学習者には、自宅でZoomから参加することも可能となる。また、授業前に資料として動画を視聴させ、意見を構築させてから授業に臨ませるという授業形態の増加も考えられる。

技術面のみならず、題材に新聞記事を選択したことは本授業の特長である。授業終了し、3か月後に、受講者2名から気づいた点についてコメントを得た。特に顕著なものは、「新聞記事による情報の取捨選択から得た気づき」であった。インターネットで調査する

と、twitter などの SNS からは、誹謗中傷、情報の真偽を問われるようなニュースも含まれ、問題点も見受けられる。受講者は新聞記事を毎日読み、分析することで、自分自身で正しい情報を見抜く必要性に対する気づきを得たと述べた。このことは、これから学習者が批判的な思考を発展させていくための一助となったと言えよう。さらに、オンライン上で、問題意識を持ったテーマについて口頭発表することで、今後の初年次教育の授業形態や展開方法に対する新たな可能性を示した。

また、授業後の振り返りから、グループに関するコメントは、協働学習の効果を示唆していると考えられる。オンライン上であったとしても、口頭発表を聴き、テーマについて考えを共有したり、グループで話し合ったりするという過程を通して、学習者同士の交流が発達し、授業外でも連絡を取り合う機会を得た。その結果、当初オンライン授業に不安を抱いていた学習者も、仲間とのインターラクションから、意欲が高まったことは、協働学習の利点であろう。

2020 年の新型コロナウイルス感染拡大によるオンライン授業は教育現場に打撃を与えた。これまでは、学習者との対面授業における直接的な対話から信頼関係を発展させ、問題点やニーズ分析によって指導法を模索してきた。オンライン上においても、IT リテラシーの修得、新聞記事の活用、指導に関する工夫、授業内外のインターラクション、及び教員の学習者への支援があれば、効果的な授業作りは可能となろう。本稿では、学習者の振り返りから得た気づきを分析して、オンライン授業における初年次教育の予備調査を実施した。今後は、本稿で得た結果を手掛かりとし、さらに継続した実践研究を続けていきたい。

注

1　PDCA サイクルは図 1、EIAHE は図 2（p. 172）を参照。

2　ブレイクアウトセッション機能は、Zoom 上で参加者がグループになってディスカッションをすることができるものである。

3　本学では、Google と Moodle を使用している。よって、Google Forms のリンクを Moodle 上に貼り付け、自由記述形式（約 200 語）で日本語による振り返りを行った。

謝辞

本稿を執筆するにあたって、本学の OJU ゼミリエゾンの中西美和先生には多大なるご助言をいただきました。また、オンライン授業において LSC（Learning Solution Center）のスタッフの皆様にはお世話になりました。さらに、2020 年度春学期の当該科目の履修者の皆さんには調査に協力していただきました。お礼を申し上げます。本稿は 2020 年 9 月 19 日に Zoom にて開催された、JACET 関西支部教材開発研究会第 5 回例会の発表内容を加筆修正したものです。本研究は JSPS 科研費 18K00900 の助成を受けたものです。

引用・参考文献

朝日新聞朝刊（2020）『遠隔授業「通学の意義」問えば深まる』21.

朝日新聞朝刊（2020）『ストレス発散に運動「楽しい」大切に』21.

朝日新聞デジタル（2020）『（新型コロナ）困っています　大学生・院生　生活費払えない、9 人に 1 人』Retrieved from https://www.asahi.com/articles/DA3S14480865.html

馬場千秋（2012）「振り返りシートから見る授業内の学生の変化：学生の気づきとモチベーションの観点から」『帝京科学大学紀要』8，139-144.

智原哲郎（2006）「大阪女学院大学」濱名篤・川嶋太津夫編著『初年次教育　歴史・理論・実践と世界の動向』149-173. 丸善株式会社.

福嶋祐貴（2018）「協働的な学習に関する類型論の到達点と課題―協同学習・協働学習に基づく実践の焦点化と評価のために―」『京都大学大学院教育学研究科紀要』64，387-399.

藤本元啓（2017）「初年次教育とキャリア教育のツールとしてのポートフォリオ「今週の活動とトップニュース」の試行について」『崇城大学紀要』42，175-182.

濱名篤（2006）「日本における初年次教育の可能性と課題」濱名篤・川嶋太津夫編著『初年次教育　歴史・理論・実践と世界の動向』245-262. 丸善株式会社.

樋口耕一（2014）『社会調査のための計量テキスト分析―内容分析の継承と発展を目指して』ナカニシヤ出版.

井下千以子（2013）「入学前教育の動向と課題―ギャップタームをどう活かすのか」初年次教育学会編『初年次教育の現状と未来』113-129. 世界思想社.

川嶋太津夫（2006）「初年次教育の意味と意義」濱名篤・川嶋太津夫編著『初年次教育　歴史・理論・実践と世界の動向』1-12. 丸善株式会社.

牧野眞貴（2017）「リメディアル学生のニーズに基づく英語授業の検討とその実践」『LET 関西支部研究集録』16，73-85.

文部科学省（2015）『平成 27 年度の大学における教育内容等の改革状況について（概要）』Retrieved from https://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/daigaku/04052801/__icsFiles/afieldfile/2019/05/28/1398426_001.pdf

森朋子・山田剛史（2009）「初年次教育における協調学習が及ぼす効果とそのプロセス―学生同士の〈足場づくり〉を中心に―」『京都大学高等教育研究』15，37-46.

薄井道正（2015）「初年次アカデミック・ライティング科目における指導法とその効果―パラグラフ・ライティングと論証を柱に―」『京都大学高等教育研究』21，15-25.

山田礼子（2013）「日本における初年次教育の動向―過去、現在そして未来に向けて」初年次教育学会編『初年次教育の現状と未来』11-27. 世界思想社.

山崎千鶴（2013）「初年次教育における入学時オリエンテーションの取り組み」初年次教育学会編『初年次教育の現状と未来』131-143. 世界思想社.

安田優（2015）「総合的英語力向上を目的とする動機付けのための一方策」『北陸大学紀要』40，54-65.

吉田美登利（2017）「大学初年次文章表現クラスにおけるアクティブ・ラーニングの実践報告―コメントシート「大福帳」から見た学習者の成長の自己認識―」『アカデミック・ジャパニーズ・ジャーナル』9，19-27.